

アゴーヴナ

マリヤ・ヴァルデンガ（訳・村野 克明）

アゴーヴナは私の幼かった頃の思い出のおばあさん。
おばあさん。

小さな頃にお世話になったおばあさんというのは誰だつて一生涯忘れられないもの。

当時の私はアゴーヴナの住む共同アパートの玄関口にあるベルに手が届かなかった。それほどちっちゃかった。いつの日か大きくなったら自分の手でベルを押してやるんだと夢見ていた。

ベルが鳴ると、アゴーヴナの住むフラットの奥の方から足を引かざる音がする。錠前がきしるとアパートの玄関口のドアが開く。見るとそこにアゴーヴナ自身が立っている。

背の高い、すらりとした体つき。白髪をたばねていた。物おじせぬ、毅然としたまなざし。

本当は「ジナイーダ・アゲーヴナ」と呼ばれていたが、私は「アゴーヴナ」としか言えなかった。勝手にそんな発音になってしまった。

それを耳にすると誰もが笑みを浮かべた。

なぜなのか、見当がつかなかった。

アゴーヴナは私の家族とはアパートの玄関口が一緒で、一階に住んでいた。

ときたまママが私をアゴーヴナにあずけた。散歩のお供に連れて行ってください、とお願いしたつてわけ。というのも、彼女はどんな天気になつても「一日四時間」の散歩を欠かさなかったから。雨の日も、雪の日も、風の日も、アパートの中庭を何度も何度もまるく動線を描いていた。これがアゴーヴナの日課だった。

中庭ではアゴーヴナは絶対的な権威があった。アゴーヴナと手をつないで歩いていて私はよく下から見上げたものだ、彼女に向かって、夫のことで愚痴をこぼす女たちを、一人暮らしの寂しさのため息をつくおばあさんたちを。

アゴーヴナ自身は何事にも決して泣き言を言わなかった。ただただ一日四時間（！）の散歩をするばかりだった。

アゴーヴナのフラットにはほかの場所では

お目にかかれないものがあつた。本物の鑄鉄製のアイロン、ひどく古めかしい彫刻細工の食器戸棚、ブラウン管のテレビ受像機、である。いつも私は彼女の部屋に駆けつけるとソファに両足を投げ出して、こわれたテレビ受像機のほこりまみれのブラウン管を眺めたものだ。やめることができなかった。

テレビの箱の上には写真が立てかけてあつた。若者が二人わらつていて、もう一人、男の人が写っていた。ある時、誰なの、と質問してみた。

——息子たちと私の夫だよ。
げんかくにアゴーヴナは答えた。そしておごそかにつけ加えた。

——戦争に行ったのさ。

——たたかったの？

うっとりして私はたずねた

——センシしたんだ。

重くアゴーヴナは言った。

「センシ」とは聞きなれない言葉だった。初

めて耳にした。弾が放たれた時のようなアツと言う間の言葉、それでいて何かの打撃音のような鈍重さがこもった言葉。どうしてか私のお腹のあたりに痛みがさしてきた。

——いま、一緒じゃないの？

世の中には「してはいけない質問」があることを五歳の私は知らなかった。

——いや、一人じゃないさ。

アゴーヴナは断言した。

——いつも一緒にいるよ。

言い切ると、誇らしげに頭を挙げてこう指図さしずした。

——何をぼやぼやしてるんだい、散歩、散歩、散歩だよ。

アゴーヴナと私は同じ中庭の「ぐるぐる散歩」を再開した。

歩きながらアゴーヴナはいつも歴史の話をした。私には意味不明のことが多かったけれど。たとえば、カクメイの時にどこかのチフスのバラックにいた、という。カクメイもチフスもバラック「隔離病棟」も私にはちんぷんかんぷん。夜ごとの夢にカクメイという名のお皿の眼まなこをした青い頭の犬が登場した。その犬の背

には、巨大な手を持ったアゴーヴナが乗っていた。青い犬はちっぽけな玩具の家々が並ぶ街路をアゴーヴナを運んで行った。家々の中には、包帯でがんじがらめのチフスという名のちびの病人たちが横たわっていた。

アゴーヴナは歩きながらこんな繰り言をしたものである。

——ネンキンは五十三ルブル、共同アパートで自分は一部屋だけのフラット、こんな暮らしはもういいよ。

私にはネンキンの意味がわからなかった。

アゴーヴナがセンチという私にはむつかしい言葉を口に出したその日は、いつもの散歩とは様子が違っていた。お互いに無口になった。アゴーヴナは凍るような外気をぜいぜいと吸い込むばかりだった。

私は何か恐ろしくて巨大なものを感じた。それをどう抑え込んだらよいかわからず歩きながらアゴーヴナのミトンの手袋をとっぱずしてしまった。ちょうど私の鼻先にあった大きな手にきつく接吻した。

——バカ！ 何するんだ！

アゴーヴナはそう叫ぶと私をはねのけた。

私はあやうく雪だまりに体を突っ込むところだった。耳をつんざくばかりの大声。あんなに張り上げた声こゑは聞いたことがなかった。

——バカモン！ 何という子こだ。

——アゴーヴナ……

びっくりしてしまった私。

——しちゃだめだよ。

——誰の手にも接吻しちゃだめだ、絶対に。

——どうして？ わるいことなの？

——お前にはよくないことなんだよ。

さえぎるように言うアゴーヴナはしやがんで私のマフラーを整ととのえ始めた。

——やさしすぎるよ、お前は。つよくならなくちゃだめさ。

アゴーヴナはそう言いつつ私をありつたけの力で抱きしめた。そして私の背後のどこかへ向かってはつきりとこう言った。

——お前のお手々に接吻してくれるような男の人とケツコンしなさい。約束だよ。

——わかったわ。

わからないながらもそうつぶやいた。アゴーヴ

ナの継ぎだらけの灰色の外套に、怖気づいた自分の顔を押し当てながら。

私はまだ五歳にもなっていないかった。

——私のユイゴンはこれでおしまい。

とアゴーヴナは締めくくった。

——忘れるんじゃないよ。

私にはケッコンという言葉がよくわからなかった。ユイゴンとなるとまるでわからなかった。

アゴーヴナは立ち上がるとカラクルの毛皮の襟の付いた古い灰色の外套から雪を払い落とし、私を前方へ、吹雪の中へと引っ張って行った。

アゴーヴナは編み物を教えてくれた。私の家族には編み物ができる者は誰もいなかった。ママもおばあちゃんもだめだった。だけどアゴーヴナは完璧だった。アゴーヴナに言わせると、——編み物はいへん有益な仕事なんだよ。「待つ」ことを助けるからね。「待つ」ってのは人生で大切な能力だが、そのためには、誰が何と言おうとも、断固として「待つ」必要があるんだ。まわりの誰もが「待つ」のをやめても自分

は「待つ」ことさ。最後の瞬間までね。ということだった。

アゴーヴナは赤茶けて古びた二つの編み棒を使ってさまざまな結び目を披露した。どちらの編み棒にもその一端に黄色の小さな珠がついていた。ある時、私は結び目を繰り返して作ることに成功した。アゴーヴナは喜んでその黄色い珠の付いた編み棒を私にプレゼントした、自分ちで練習するように、と。その時、彼女は言った。

——私のことを忘れるんじゃないよ。

私は編み物の練習に励んだ。その成果を見せたいと思った時、アゴーヴナはいなかった。ある時、彼女に代わって隣人のタタール人がアパートの玄関口のドアを開けた。開けると黙ってくびすを返して自分のフラットに戻って行った。

私はなじみの廊下へと足を踏み入れた。アゴーヴナのフラットのドアは錠が閉ざされていた。アゴーヴナは消えてしまった。どこへ行ったのか誰も知らなかった。隣人たちに質問してみたが、誰もが眼をそら

した。数週間にわたる私の質問攻めに困り果てたママは、とうとう、アゴーヴナは病院に運ばれたのよ、と言った。

——どの病院なの？

と私はせっついた。

——私、行きたい。

ところがママは、何という病院だったか、どうしても思い出せない。ママの記憶力が急におかしくなった。どこにある病院かもついに言い出せなかった。

それならと、ほかほかの襟巻を編んでみようとした。編むことは、アゴーヴナが元気になって戻ってくるまで「待つ」ことには役立つだろうから。

私は猛スピードで編むことができるようにと頑張った。おかげで七歳になる頃には中庭にたむろする老練なおばあさんがたの誰よりも素早く編み棒を動かすことができた。中庭に出ると小さなベンチに腰掛け、一階にあるアゴーヴナの部屋の窓の前で、私はかたくなに編み物に没頭した。

その時の私はアゴーヴナの言葉を忠実に守って「待つ」ということをしていたのだ、「誰

が何と言おうとも、断固として」。

そのあとで、アゴーヴナの部屋の窓に新聞紙が貼られていくのを目にしたのである。その瞬間、わかった、アゴーヴナは決して戻ってこない、と。

その時、「死」がどんなふうに見えるかがわかった。「死」とは新聞紙が貼られた窓のことである、と。もう待つこともなければ待たれることもないのだ、と。

黄色い小さな珠たまの付いた赤茶色の編み棒二本は、今も私の机の中に仕舞われている。

(了)

補記

● 原題

<Агона> 『アゴーヴナ』。(原文ロシア語)

● 出典

Мария Вардена - <Когда вернется бабочка>.

Оборник расказов. М., Абрис. 2018 г.

マリヤ・ヴァルデンガ著『蝶が戻る時』短編集、

モスクワ「アープリス（輪郭・見取り図）」社、

二〇一八年刊。

● 著者（女性）

現代ロシアのジャーナリスト、作家、脚本家。

モスクワ国立大学文献学部卒。同大学歴史学部大学院卒。全ロシア国立映画大学シナリオ学部卒。一九八〇年代後半からジャーナリストとして活動。二十一世紀に入り今日まで映画やテレビドラマの脚本を執筆。

● 語注

・「共同アパート」(Коммунальная квартира, или коммуналка) Ⅱ「施設共用住戸。二世帯以上用住戸で、居室は各世帯専用だが台所、便所、浴室などを共用。」(稲子恒夫著『政治法律ロシア語辞典』、ナウカ株式会社、一九九二年二月二〇日初版発行。一五六頁から引用)。

・「中庭」(двор) 「市内のアパートは、道路で囲まれた区画の外周を、建物がロの字型や凹凸型の形に囲み、その内側に中庭があるタイプが多い。これはロシアに限らず欧州の建物の特徴かもしれない。この中庭は小さな公園であったり、花壇であったり、住民の駐車スペースであったりする。住民は建物の外周からアーチをくぐってアパート建屋の中に入る。このアーチ部分のスペースは中、高さとも車が自由に出入りできる空間である。大きなアパートであれば十箇所程度の подъезд (ポドイェストⅡ玄関口) があり、自分の住まいの玄関口から出入りする。この玄関口には車を止

められるほどのスペースがある。ポドイェストの前にはベンチがあり天気の良い日は、おばあちゃんが日がな一日、日向ぼっこをする、そうしたスペースである。」(美水正一著『ゲーカーチェーペー(国会非常事態委員会)』、私家版、本文一六六頁、写真五七枚、二〇二〇年六月発行。七六〜七七頁から引用)。

(二〇二〇年六月二十日攷筆)



格闘技「サンボ」の創始者オシエプロフ、諜報団を率いたりヒヤルト・ゾルゲ、そしてソ連の探偵小説の先駆者ロマン・キム……本人・関係者の文章と公的資料を駆使し、ロシア/ソ連という国家の転変に翻弄されたスパイたちの数奇な運命を描き、「東京」という都市に残されたその痕跡を著者自身の足で辿り直した、異色のドキュメント。 村野克明訳 二〇一六年十二月 藤原書店刊